

史料にみる **歴史**

ラクスマン来航の世界史的背景と 江戸幕府

— 「光太夫と露人蝦夷ネモロ滞居之図」 —

(『社会科 中学生の歴史』p.125掲載)

早稲田大学図書館所蔵

本絵図は、寛政4（1792）年に日本人漂流民大黒屋光太夫らを送還する目的で来航したロシア使節アダム=ラクスマンらの根室滞在中のようすを描いている。同じ構図の絵図が複数現代に伝来しており、写真のない時代に記録として流布していた一点である。光太夫らは、天明2年年末（1783年1月）伊勢（三重県）を出発したが、海難に遭い、アリューシャン列島に流れ、ロシア人に助けられ、1791年にロシアの首都サンクトペテルブルクに到着した。寛政4年9月に来航したラクスマンらは、根室で越冬、翌年6月松前へ行き、幕府と交渉した。

この絵は、左端の奥書から松前藩士下国矢門が所持していた絵の写しであることがわかる。一行は全員ロシアの毛皮などを着た冬服を着ており、見た目は誰であるか区別できないが、人物の説明から次の4人に注目してみよう。第一の人物は画面右端のラクスマンである。彼は、この派遣の立案者キリール=ラクスマンの息子で、老父に代わって、この使節を率い、同時に博物学者として、来航時にさまざまな記録を残している。第二に、右から2番目にいる「商人」である。ロシア側は日本とすぐに貿易がで

きるとは期待していなかったが、将来に備え、商人を同行させて、日本貿易市場の調査をしている。第三は、右から4番目の「通詞」である。通詞とは今日の通訳にあたる。国交のなかったロシアでは、すでに実は日本語教育がなされていた。1739年には、漂流した薩摩人ゴンザとソウザの協力により、世界初の露日辞典ができていた。その実力はともかく、一行にロシア人の日本語通訳が同行していることは、ロシアが長い間、日本に関心をもっていた証である。さらに第四に、左から3番目の人物、ロシア人の衣服を身につけているが、黒髪で、この使節で日本に送還されてきた船頭幸（光）太夫がいる。

ロシアが使節を派遣したのはラッコ皮が関係する。もともとロシアは、中露国境キャプタで中国と貿易を行い、主要なロシアからの輸出品はシベリア産などのラッコ皮であった。しかし、1776～79年の有名なイギリス人探検家クックによる世界航海で、アラスカ産ラッコ皮が中国広東では高値で取引されることがわかり、イギリス・アメリカなどの商人が、相次いでアラスカを目指すようになった。おりしも中露貿易は1785年から中断していた。シベリアのラッコ捕獲が減少するなかで、世界的に毛皮貿易の主導権争いが激化したため、ロシアでは商人たちが会社をつくり、1783年以降アラスカに拠点を設けた。しかし、アラスカはロシア首都から遠かった。そこで、中国南部と日本が、ラッコ皮などの貿易市場と、アラスカ経営の補給地として注目された。イギリスも同様に、中国と日本

をめざし、光太夫を雇う計画も存在した。そこでロシアはイギリスに先じて、18世紀末にオランダ以外に、日本へ来航する最初の欧米諸国となった。以後、イギリスやフランスの船舶が日本近海に出現する。

幕府はどう対応したのだろうか。幕府は、漂流民を受け取り、ロシアからの国書と贈り物は受理しなかったが、まだ交渉の余地があるという含みをもたせて長崎への入港許可証（信牌）を与えている。この時期、松平定信による寛政の改革の最中であった。幕府は、日本の海防が不十分なこともよく認識しており、まずは「国書のやりとりはせず、外交交渉があれば長崎で受けつけることにしている」という「国法」をつくり上げて、それを口実にいったん帰国させている。のちに「鎖国」と認識される日本の外交体制は、この時に初めて理論化されたのである。幕府内部でも北方の脅威やアイヌ支配をめぐり、蝦夷地（北海道）政策は意見が割れ、それも一因となり、日露交渉の直後に定信は解任されている。そして文化元（1804）年、長崎に来航するレザノフはこの信牌を持参し、国交が成立すると大いに期待していた。しかし、国交開始を拒否されたことから、報復として文化3・4年には蝦夷地で日露紛争が勃発し、日本側は軍事的敗北を重ねた。

この絵は、18世紀末のロシアの日本接近が、世界の貿易構造における変化のなかで必然の結果であったことを教えてくれる。

(長崎大学准教授 木村直樹)